

浜田久美子著

『日本史を学ぶための図書館活用術』

―辞典・史料・データベース―

永田 一

本書は、日本史の初学者に向けて、図書館に所蔵される辞典・年表・通史等の参考図書、そしてデータベースの特徴を紹介し、その活用方法を解説したものである。著者の浜田久美子氏は、日本と渤海の関係を中心に、日本古代の対外関係の研究者としてすでに広く知られているが、国立国会図書館司書として二〇年以上勤務した経歴の持ち主でもある。本書は、図書館司書として豊かな経験を有する著者が、インターネットが普及し、オンラインデータベースの公開や書籍の電子化が進んだ現状を踏まえたうえで、図書館の有益な活用術についてまとめた内容となっている。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 レポートを書くには

第二章 日本史の辞典

第三章 データベースの活用方法

第四章 史料を読み解く

第五章 時代や地域の全体像を知る

おわりに

参考資料1 『日本史大事典』巻頭カラー図版

参考資料2 『歴史考古学大事典』収録の一覧表

辞書年表

索引

まず、本書の内容について紹介していく。

第一章では、レポートの書き方について解説している。レポートの作成には、情報収集・情報の整理・文章構成といった準備作業が必須だが、その過程を例題を掲げて説明する。論文を読む際、初学者はまず通史を読んで概略を理解したうえで専門論文を読むべきことや、集めた情報を整理して疑問点を明確にし分析を加えることを述べ、参考文献を引用する際の注の付け方や出典の書き方の具体例を示すなど、その説明は極めて丁寧で、大学に入学してはじめてレポートを書く学生に向けて最適な内容となっている。

第二章では、日本史を学ぶうえで必要となる「日本史辞典」「人名辞典」「地名辞典」「年表」について紹介する。編者・出版社・刊行年・冊数・項目数などの基本的な情報を紹介したうえで、各辞典の「特徴」「活用方法」「類書」などについて解説する。誰もが一度は、図書館でたくさん辞典を前にして、自分が知りたい事柄について、どの辞典を引くべきかが分からず困ってしまったという経験をされているのではないだろうか。辞典には必ず編集方針やコンセプトがあり、それに沿った内容になっているが、学びはじめのうちはなかなかそれを理解できず、ついコンパクトで手軽な辞典や手近にあった辞典を引いてしまいがちである。本書はそうした疑問に答えるため、各辞典がどのような情報について充

実した内容となっているか、あるいはこういった作業をする際にその辞典の利用が適しているのかを詳しく説明している。たとえば、「日本史辞典」の『日本史文献解題辞典』（加藤友康・由井正臣編、吉川弘文館、二〇〇〇年）の紹介における「活用方法」に「まずは本書で史料や諸本の基礎を知り、そのあとデータベースで所蔵機関や画像データの有無を調べるのが効果的であろう」とあるように、辞典を利用して研究を進めていく具体的な手順を説明している。実際に辞典を用いて研究をした経験に基づく情報であり、それをすぐ実践できるよう解説しているところも、初学者にとって大変有益である。また「類書」では、同様の事柄について調べるのに便利な辞典や参考書をさらに紹介している。

第三章では、論文検索の「総合的なデータベース」「分野別データベース」と「史料を検索できるデータベース」について紹介する。契約データベース・有償のものを除いてURLが記されており、興味を持ったものからすぐにアクセスできるようになっている。論文検索の「総合的なデータベース」「分野別データベース」では、「活用方法」や検索の方法などを紹介する。「総合的なデータベース」における「C/Ni-Articles 国立情報学研究所 (NII)」「NDL Online 国立国会図書館 (NDL)」の紹介では、画面を掲載して検索方法を解説しており、大変分かりやすい。「分野別データベース」では、「活用方法」でどのような情報がより詳しく得られるか特徴が述べられている。「史料を検索できるデータベース」では各データベースでどのような史料の検索が可能か、またイメージ画像の閲覧が可能かなどについて説明している。

第四章では、「漢和辞典」「国語辞典・古語辞典」「古文書用語辞典・

くずし字辞典」「史料の注釈書・現代語訳」について紹介する。各辞典について、編者・出版社・刊行年・冊数・項目数などの基本的な情報を紹介したうえで、「特徴&活用方法」について解説する。例えば、「漢和辞典」の『学研新漢和大事典』（藤堂明保・加納喜光編、学習研究社、二〇〇五年）の紹介では、『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』（観智院本・図書寮本）等の古辞書の古訓が採録されていることを説明している。どのような史料を出典として熟語や古訓等を採録したかなど、各辞典の特徴が解説されており、「こういった種類の史料を読んでいる、意味（や読み）が分からない熟語に出くわした場合、どの漢和辞典から引けばよいのか」といったことを知ることができる。また、初学者にとって重要なのが「史料の注釈書・現代語訳」だろう。「六国史」「律令格式」「古記録」「儀式書」「中世史料」について、校注者・出版社・刊行年・冊数・底本などの基本的な情報を紹介し、特徴について解説する。たとえば八世紀の研究の基礎史料である『続日本紀』を読もうとしても、史料本文のみのものから、史料本文・読み下し・注釈という構成のもの、現代語訳のみのものまで、いろいろ刊行されており、初めて読む方はどれを選べば良いか迷ってしまうだろう。そうした時、本書の説明は、今の自分の目的に合った『続日本紀』の注釈書（または現代語訳）を選ぶうえで、大いに参考になる。また、各注釈書を紹介したうえで、「現代語訳は解釈の一例なので信用しすぎず、必ず別の本で史料本文も見てほしい」と、研究の注意点も述べている。

第五章では「通史」「地域史」について紹介する。時代の全体像を知るための「通史」の紹介では、初学者向けのもの、もう少し詳しいものの、

そして研究者向けのものと、難易度によって分類し、出版社・刊行年・冊数などの基本情報に加え、それぞれの特徴を解説している。「地域史」の紹介では、各自治体がどのような自治体史を出しているのかについての調べ方などが説明されている。

以上、駆け足での紹介となってしまったが、最後に本書全体を通じての所感を述べさせていただく。

本書の最大の特徴は、日本史の初学者、特にこれから大学で日本史学を学びはじめる学生を意識し、その学習の手引きとなるよう、極めて丁寧に解説されていることである。単純な書誌の説明では終わらず、これからレポート作成、あるいはゼミ発表の準備をする学生が、すぐに辞典や参考書、データベースを活用して作業を進められるよう、具体的な説明がされている。しかもそこには「こういうことを調べる際は、まずこの辞典を引き、その後でデータベースを活用する」「こうした用語を調べる際は、この辞典より別の辞典を引いた方がよい」など、本来は経験することによってのみ得られる研究手法、研究の方法論が含まれている。初学者にとって大変心強い味方となってくれることはもちろん、本を求める学生を導く図書館員や、指導する教員にとっても、現在の学生に対してどのような手引きが有効であるかを改めて考えるうえで大いに参考になる。

著者の専門が日本古代史のため、古代史・中世史の研究で使う本やデータベースの解説が中心の構成となっているが、他の時代を学ぶ方にとっても本書が有用であることには変わりはない。紹介されている辞典・データベース・通史等は古代史・中世史以外の研究でも活用できるもの

が多数含まれているし、方法論もまた十分に応用ができる。古代史・中世史のみならず、近世史・近現代史を学んでいる方々にとっても、必読の書である。

二〇二〇年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、全国各地の図書館が暫くのあいだ休館となったり、利用が制限される事態となった。また、多くの大学で一時構内への立ち入りが禁止、あるいは制限され、大学図書館も休館や時間短縮開館になるなど、学生が例年のように利用できなくなった。各図書館は入館人数や滞在時間に制限を設けて開館するなど、難しい状況のなかで利用者と図書館員の健康と安全を守りながら利便性を維持すべくさまざまな努力をしているが、(この「書評と紹介」の原稿を書いている)八月末の段階で新型コロナウイルス感染症拡大の終息はまだ見通せず、残念ながら以前のように普通に利用できる状態にいつ戻るのかは不明のままである。こうした状況は、以前から図書館に親しんでいた人に対し、図書館が普通に利用できることのあることが再認識するとともに、オンラインデータベースや電子書籍など、インターネットを通じたサービスの便利さに目を向ける機会をもたらした。ただし、これまであまり図書館に足を運んでこなかった人にとっては、図書館に直接行かずとも、ネットを通じて得た情報だけで何とかなる、あるいはそれで充分だと思ってしまうきっかけになる恐れがある。

本書の「はじめに」で述べられているように、研究においてネットで検索できるのはほんの一部のことにすぎず、膨大な研究史は紙の本に蓄積されている。オンラインデータベースや電子書籍などは確かに便利だ

が、それらは膨大な情報や研究史の入口なのであって、大切なのはそこから図書館を通じて専門の深い領域へと分け入っていくことである。レポートの書き方をはじめ、辞典・データベースの活用法が詳細に解説された本書は、日本史の初学者が最初の一步から、一つ一つ段階を踏んで成長し、専門の深い領域へ歩みを進めるうえで必携の書である。これから日本史を学ぼうとされている方へ、是非本書のご一読をお勧めする所以である。そして、本書を手にした読者諸賢におかれては、新型コロナウイルス感染症拡大が終息し、図書館が制限なく以前のように利用できるようになった時、改めてその魅力を存分に味わって欲しい。

（四六判、一九八頁、二〇二〇年三月、吉川弘文館、一八〇〇円＋税）

（ながた・はじめ 法政大学・高崎経済大学・横浜美術大学・明治大学
兼任講師）